

npo-if

世界史研究所

Research Institute for World History



ニュースレター

Newsletter

No. 1

2004年7月

発行：NPO-IF 世界史研究所
千葉大学文学部史学科西洋史研究室

世界史研究所の設立にあたって

南塚 信吾

近年の歴史学は、目覚しい理論的・実践的發展をみせているが、それは同時に歴史の地域的細分化と方法論的細分化をもたらししている。歴史家は、その専門を深く研究していればそれがおのずから世界史を豊かにすると考えている。しかし、だれが、どのようにしてとは考えていない。その仕事はいわば「他人任せ」なのである。私たちは、世界の諸地域、世界の諸国の歴史は書ける、そしてそれらの集合はできる。しかしかなる視角で、いかなる方法で、世界史を書くのかとなると、これはばらばらなものの寄せ集めでしかない。ナショナル・ヒストリーの克服が叫ばれるなかでの社会史の進展も、結局は一国史を乗り越えるには至っていない。これは言い過ぎであろうか。

一方で、歴史の現実においては、グローバリゼーションといわれる事態が急速に進行している。グローバリゼーションは、文字通りグローバルな事態ではないとしても、世界史に大きな変動を与えていることは否定できないであろう。歴史学はこのような事態に対応できるのだろうか。

現在、歴史学に求められていることは、統一した視角と方法で、人類の全体としての歩みを知り、行方を展望することではないだろうか。確かに歴史学の学会ではときどき世界史を意識したテーマが立てられ、世界史を問う企画が出版社で組まれてはいるが、それはアドホックなものでしかない。世界史を愚直に一貫して求める場所もあっていいのではないだろうか。

これを、「世界の歴史」ではなく「世界史」の必要性と表現したい。

* *

ところで、そのような世界史の方法はどのようなものであるのか。それは、単に「国民国家」の歴史を領域的に越えればいいのだろうか。アメリカのP. マニングは、1900年代に世界史研究への地域的、主題的、概念的アプローチが現れてきていると指摘している。たしかに、そのような国民史を越えた世界史への試みがあるとして、その場合、その歴史家はどのような視点と方法から世界史を見ているのかということが大切ではないだろうか。どのようなアプローチにせよ、国民史を越えた世界史を目指してればいいのか。世界史ならばなんでもよいというわけではないであろう。

そこで示唆的なのは、やはり、かつて江口朴郎先生が示しておられた観点ではないだろうか。

もちろん、存在するものから出発する（江口）、つまり、歴史の外に歴史を裁く基準を設けない（カー）という歴史学の基礎を前提としつつ、江口先生が示されたのは、

- 1) 豊かなものが天国へ行くのは、ラクダが針の穴を通るより難しい。
- 2) 一方に先進的なものがあるとより遅れたものは同じ道を歩めない。

3) こっちが引込めば、あっちが膨らむ。
という三つの観点から世界史を見るということであった。

第一の観点は、人間の認識能力は進んできているにもかかわらず、なおかつそれには限界があるということの意味しており、江口先生の表現では、地球上のより恵まれないものの主張が、いかに本能的であれ、より間違いが少ないという観点である。

第二の観点は、「国際的契機」とも言われたもので、大塚史学の近代主義批判の意味を持っていた。たとえば、19世紀はじめの時点で考えれば、イギリスの進んだ綿工業があるところでは、フランスやドイツは絹工業や麻工業で対抗せざるをえないという現実、19世紀末で言えば、ロシアは近代的なフランスと同盟することによって、そのツァーリ体制に近代的な意義が与えられるといった事実を指していた。

第三の観点は、江口先生の言われる「ゴム風船」の論理で、国際関係上、ある地域での緊張関係が均衡に達すると、緊張は他の地域に向かうといった事態を指していた。それは、日清・日露の時代の国際関係の分析で実証されたわけである。

世界的規模での帝国主義と民主主義の対抗関係ということ絶えず考えておられた江口先生は、常に世界史を実践されていたように思われる。そして、晩年には、歴史学の課題として、世界の諸地域が生きていけるための「調整」ということをあげておられた。これは、世界史的な視野がなければ不可能な実践的課題であると思われる。

* *

さしあたり、こうした江口先生の観点を活かしつつ、国民史を越えた世界史を模索していくことを、本研究所の目的としたい。方法としては、社会史や「言語論的転回」など江口先生の時代に比べて新領域が開拓されてきていおり、素材としても未開拓な地域の研究が進められており、手段としても高度な電子化された史料の利用が可能となってきたはいるが、歴史の姿勢としては、いわば原点に帰るということであろうか。

こうして、随分と野心的な課題を掲げて世界史研究所を発足させるわけであるが、まだまだ資金的には心もとない状態にある。幸い、人的な潜在的資源のほうは豊かになっていると考えられるので、そういう利点を極力活用できればよいかと考えている。

なお、本研究所は、NPO 歴史文化交流フォーラムと千葉大学文学部史学科西洋史研究室との密接な連携のもとに、企画され、設立されたことを、お伝えしておきます。皆様からの暖かい、しかも強力な、ご支援をいただきますようお願いいたします。

2004年7月10日

文献紹介

Patrick Manning, *Navigating World History: Historians Create a Global Past*, Palgrave Macmillan, 2003

南塚 信吾、吉橋 弘行、田中 一生

アメリカ合衆国において「世界史」の研究と教育について精力的に研究をしているのは、ボストンの Northeastern University にある World History Center の所長であったパトリック・マニング教授である。かれは、2003年に『世界史をナビゲートする』という本を著して、世界史研究の歴史、現状、方法を整理している。ここではかれの著書 Patrick Manning, *Navigating World History*, 2003 の内容を紹介することにする。彼はアフリカの奴隷および奴隷貿易の歴史の研究が専門であり、近年では以下のような著作がある。*Migration in Modern World History 1500-2000* (Belmont, CA: Wadsworth Thomson Learning, 2000), CD-ROM: *Slave Trades, 1500-1800: Globalization of Forced Labour* (Variorum: Aldershot, Great Britain, 1996).

History from South Africa: Alternative Visions and Practices (Philadelphia: Temple University Press, 1991).

マニングはまず、世界史の研究の歴史を振りかえる。それを要約すると、(1)19世紀までは、世界史を実践する人は歴史哲学者であった。それは、ルネッサンスの思想家から、ヘーゲル、マルクス、ウエーバーまでを含む。(2)1900-1965年のあいだは「壮大な総合」の時代であった。ここでは、シュベングラー、H. G. ウェルズ、トインビー、レーニン、ネルー、G. チャイルド、W. L. ランガー、ボラニー、ドップ、ブローデル、W. マックニールなどが念頭に置かれている。そして、(3)1965-1990年の時期には、「グローバルな思考」が展開された。意味されているのは、A. G. フランク、Ph. D. カーティン、I. ウォーラーズテイン、A. W. クロスビー、E. ウルフ、E. ホブズボウム、P. ケネディーといった人の仕事である。

そうした前史の上に、1990年以後、「世界史の実践」が行われてきているとマニングは言う。それは、以下のようなアプローチに分けることができる。

a) 地域研究的アプローチ：複数の地域間のつながりや類似性を示す研究で、例えば、中国、東南アジア、ミシシッピー渓谷といった地域的の連関の研究などがある。また、ある地域の研究を他の地域との関係のなかで行う方法もここに含められる。例えば、中国、中央アジアをグローバルな世界へ繋ぐ研究、あるいはインド洋研究を東南アジアや地中海との関係で論ずる研究などが上げられる。

b) 主題的アプローチ：特定の主題で世界全体を通してみる研究で、例えば、帝国というテーマがあり、ユーラシアやインド洋世界を「世界システム」的に研究するものや、ブローデルの地中海世界にならって「インド洋世界」を研究して、東アフリカから日本までの「日常生活」の構造のつながりを明らかにする研究などがある。このほか、物や商品の移動、人の移動、ジェンダー、言語、技術、環境からのアプロ

ーチ、さらには、文明論的アプローチもこれに含まれる。

c) グローバルな概念的アプローチ：個々の研究との対話をする総合的な世界史論が始まった。諸地域間の相互作用についての研究や、時期区分についての研究、さらには、『ビッグバン』以来の自然史を含んだ大歴史「ビッグヒストリー」を描く動きもここで注目されている。

こうして、歴史家はそれぞれの狭い専門領域の精密な研究に甘んじていることはできなくなってきたとマニングは警告するのである。

このような歴史的变化をもたらした要因として、マニングは三つの主要な変化をあげる。ひとつは、歴史の方法の変化であり、ついで地域研究の発展であり、三つにグローバル・スタディーの登場である。最初の歴史の方法の変化として上げられているのは、歴史学の隣接諸科学の変化、社会史、文化史、ジェンダー史、歴史語学などの登場であり、世界史研究をするものは、特定の方法をマスターするとともに、他の学問分野における変化にも注意を向けている必要があると言う。地域研究については、それが欧米の歴史研究重視という不均衡を是正しつつあるとはいうが、依然として地域そのものに浸かってしまった研究も多く、広い視野での研究が望まれるとする。そして、グローバリゼーションの進展とともに、さまざまな「ビッグ・ヒストリー」が提案されてきているが、それらの方法的な点検も必要であることを指摘する。

以上のような方法的变化にもよって生み出された最近の成果はいかなるものであるか。それは、「新しい世界史」と評されるほどのものであるという。そしてマニングは、政治・経済史、社会史、環境・技術・健康史、文化史における成果を点検し、その課題を指摘している。社会史については、マニングは、「グローバルな社会史」がなかなか現れて来ないと言いつつ、たとえば、環境史では経済と環境の関係についてのグローバルな視野の研究が出てきていることや、健康史においても疫病の大陸間伝播の研究など注目すべき研究が現れてきていることに注目している。

こうした検討を終えて、マニングは、世界史の研究方法はいかなるものであるべきかを提案する。まず、世界史を研究する際に、自分の研究が持つ「時」と「空間」と「主題」の点での「規模（スケール）」を自覚することが重要であることを指摘したうえで、世界史研究には、歴史研究の方法（史料の扱い方などのほかに、仮説とフィードバックの実行ということも含む）が統一されていること、概念や用語が比較可能であることなどが必要であると言う。

最後にアメリカ合衆国における世界史研究と世界史教育の諸機関・施設の紹介があるが、ここでは触れないことにする。

マニングの本書は、世界史の研究と教育についての包括的な案内であり、しかもかなり高度なスケールの大きな案内書である。非常によく目が届いた整理がされている。また、アフリカ史の専門からの視点も良く生かされている。世界史を考えていくためには、こうした整理のうえに議論を効果的に積み上げていく必要があるといえよう。このような地平の上に、アフリカから見た世界史、ラテンアメリカからみた世界史、インドからみた世界史、東欧やバルカンからのそれといったものが、それぞれに色彩や意匠豊かに現れて対話することが望まれる。

文献紹介

Ivan T. Berend,

History Derailed: Central and Eastern Europe in the Long Nineteenth Century,
University of California Press, 2003

姉川 雄大 (千葉大学大学院 博士課程)

著者のベレンド氏は現在 UCLA 教授で専門は 19 世紀から現在までのヨーロッパ経済史、中東欧史。本書は、*Central and Eastern Europe 1944-1993: Detour from the Periphery to the Periphery* (Cambridge University Press, 1996)、*Decades of Crisis: Central and Eastern Europe Before World War II* (University of California Press, 1998) について (から遡って)「長い 19 世紀」の中東欧史を扱ったものである。

本書は主に序章と 6 章から成り、大まかに分けて、19 世紀中頃以前と以後についての記述にそれぞれ前半と後半の 3 章を充てている。以下本書の構成を示した上で内容を紹介し、次に本書の特徴と世界史研究としての本書の提起する問題について触れることにする。

本書の構成は以下の通り。

序章：東の理想とモデルとしての西の出現

第 1 章：勃興する西の挑戦と「眠れる東」における応答の不在

第 2 章：中東欧におけるロマン主義とナショナリズム

第 3 章：蜂起と改革：独立と近代化のための闘い

第 4 章：第 1 次大戦前、半世紀間の経済的近代化

第 5 章：社会的転換：「二重の」社会と「不完全な」社会

第 6 章：政治システム：民主化対権威主義的ナショナリズム

エピローグ：第 1 次大戦

序章では、中東欧のエリートたちが西欧に対する自らの後進性を認識し、その格差を埋めることを目標に設定したことが述べられている。

第 1 章ではまず、15 世紀末から 18 世紀にかけてのヨーロッパの東西分岐について述べ、これを「長い 19 世紀」の「中東欧」史の前提とする。この時期に農業革命とプロト工業化を達成して 19 世紀の二重革命の時代へ移行できた西欧に対し、再版農奴制を導入した中東欧では従属的・周縁的役割においての資本制世界システムへの参加であったため、工業化・都市化のみならず国民国家と代議制民主主義の条件も欠如していた。

第 2 章で扱われるのは西欧と異なった中東欧におけるロマン主義である。啓蒙主義とロマン主義が混ざり合っただけで来たために、国民文化の創造は国民国家を達成する条件であるとともに進歩の理念とも同義となって 19 世紀の中東欧史の主要な動因となったことが述べられる。

第 3 章では 1848 年を中心に、国民概念と社会的要求との矛盾の顕在化と、ナショナリズムの保守的・排他的性格への変質を論じている。

第 4 章では、工業化した西欧を市場とする食料・原料輸

出と、西欧資本による 1860 年代以降の経済的近代化を扱っている。中東欧は輸出牽引の工業化と経済ナショナリズムによって自由貿易システムへ対応したが、西欧との中心—周縁関係は中東欧内でも再生産され、特に中東欧とバルカンの間の地域的格差を拡大した。

第 5 章ではこの地域の社会の特質について以下のように論じている。まず中東欧では依然、政治的権力や社会的地位を保持する貴族=旧エリートと近代ブルジョア=新エリートから成る「二重の」社会、バルカンではナショナルエリートが存在しない「不完全な」社会が出現した。またこのような社会においては、在地の中間的なエリートの成長が不十分なため、農民と地主・雇用者の間には、階級に基づいたコンフリクトが民族的・宗教的なものとして生じることにもなった。

第 6 章は中東欧の政治システムをとり上げ、議会制民主主義の不成立を主題とする。それを妨げた要因として、第 1 に工業化と社会の近代化の失敗、第 2 に独立・統一した国民国家の不在、第 3 に帝国の独裁制・権威主義と原理的ナショナリズムを挙げている。

本書の特徴として、第 1 に、最新の諸研究を参照しつつ経済、文化、社会、政治を中東欧の近代化の歴史の中に有機的・合理的に組み込む試みである点が挙げられよう。第 2 の点は、本書は各国史ではない「中東欧」史であり (序論)、ベレンド氏が一貫してそうしてきたように、世界システムの中の地域に立脚して議論を組み立てていることである。

本書が提起する論点は、近代化論の射程の範囲、自由主義や議会制民主主義の概念、ナショナリズムの「東欧的」な展開と変質などさまざまに考えられるが、ここでは地域の設定の問題についてその世界史研究上の意義を考えたい。ここで地域は、西欧を意識した非西欧である中東欧として設定される。つまり、第 1 に中東欧は西欧的発展の不在、すなわち社会的には「二重」もしくは「不完全」で、政治的には議会制民主主義と国民国家の達成の失敗によって特徴付けられ、第 2 に中東欧は西欧を参照点として意識し続けた地域とされる (序論)。

この場合、地域を構想するさまざまな次元や主体について、その存在する条件自体の有無も含め、いかに評価しうるかという問題がある。言い換えるならば、これらとグローバルな経済システムとの関係を「中東欧」ですくいきれるのかという問題である。したがってここで提起される問題は「中東欧」のみならず、世界史研究において地域の分節とその基準をいかに複眼的に捉えうるか、ということである。また本書においてはこのことは、「西欧近代」、特に国民国家と議会制民主主義のありかたが、どこまで世界システムの中での地域という議論に組み込めるのか、地域を設定する要素であることに耐えうるのかという問題でもある。

言うまでもなく、本書はこの議論を解決する道筋を立てているのではなく、一方の極に位置づけられるものでしかない (ただしその最良の例として)。しかしここで提起される問題は、世界史研究を構想する上では常に念頭に置かれるべきであり、そのため常に参照される 1 冊として、本書の意義はきわめて大きいと言えよう。

川上音二郎・貞奴と 1900年前後の世界

木村 英明

シカゴ万博が開催された1893年、6月8日付の『萬朝報』紙上に、当時の宰相伊藤博文の寵愛を受け、そのお転婆ぶりでも勇名をはせていた一芸者に関するゴシップ記事が掲載されている。「霞町芸妓の變わり者濱田屋奴は浮気も遣り芝居も遣り泳ぎも遣れば馬にも乗ると變わった事を仕尽したれば今度は尚進んで米國シカゴの博覽會へ見物に出懸んと思ひ立ち（略）伊藤後藤岩倉の貴顕を始め田中米倉の紳士連をも叩いてその運動費の募集中なるが…」。このとき結局、芸者「奴」のシカゴ遊山の夢は実現しなかった。しかし、7年後の1900年のパリ万博に「貞奴」と名を変えて姿を現した彼女は、女優として一躍国際的な脚光を浴びることになる。

アメリカ、サン・フランシスコ出身で後にヨーロッパ、ロシアで活躍する裸足の舞踏家、イサドラ・ダンカンには回想録で次のように記している。「1900年の博覽會での一大印象は、日本の悲劇舞踏家川上貞奴の舞踏であった。毎晩アレと私はこの偉大な悲劇役者の驚異すべき芸術に吸い込まれていった」（『わが生涯』小倉重夫、阿倍千津子訳）。

また、フランスの作家アンドレ・ジッドは5回貞奴の舞台に足を運んで、その感想を手紙にしたためている。「…この場で三度重ね着した薄い衣装を脱いで変身する貞奴は実に見事です。すぐあとで彼女の狼藉が惹き起こした混乱の中に、蒼白な、着物をはだけ、髪を振り乱した彼女が目釣り上げて再び現れたときは更に見事でした」（『アンジェルへの手紙』小林秀雄訳）。

ほかにもピカソやロダンなど、貞奴はモダニズムの芸術家の間に強い関心と呼び起こしている。会期中364回に及んだ公演は興行的にも大きな成功をおさめ、その影響はゲランの香水「ヤッコ」の販売や着物風のドレス「ヤッコ服」の流行というような社会風俗にまで及んだ。

そもそも貞奴が近代日本初の職業女優になるきっかけを作ったのは、夫の音二郎だった。パリ万博前年のアメリカ巡業の際、彼が半ば無理矢理に貞奴を舞台に立たせたのである。旧劇（歌舞伎）に対抗する新劇の礎を築いたとされる川上音二郎は、明治10年代に自由党の壮士として活動した後、20年代にいわゆる壮士芝居を旗揚げしている。「権利幸福嫌いな人に自由湯をば飲ませたい、オッペケペー、オッペケペッポーベッポッポー」と歌うオッペケペー節で広く世間にその名を知られ、皇太子も観覧した『壯絶快絶日清戦争』などナショナリズムを鼓舞する芝居であたりを取った。ただ、同じく自由民権運動の出身で、日本と世界を舞台に繰り広げられる希有な政治小説『佳人之奇遇』の作者、東海散士のような強い国権拡張の政治的主張はその発言からあまり感じられない。それでも、1901年から翌年にかけての第2回欧州公演の際には、ブダペストから次のような通信を書き送っている。「…匈牙利は露國に對し一日も復讐の念を忘れざる今日圖らず日英同盟の成立して其顛末を争うて歐州の各新聞に掲載され以來匈人が日人に對する同情の度を一層高め來りし其矢先我々一向が乗り込みたるは誠に得易からざる好機會にて…」

（『都新聞』1902、4、9）と、国際社会で日本のプレゼンスが高まりゆく期待に高揚感を抱いている様子が伺われる。

日露戦争前後の時期（三度目の欧州行きは1907～08）に日本と欧米を往来した音二郎、貞奴の軌跡上には、当時を代表する政治家、外交官との密接な交流が散りばめられていて興味深い。二人の婚礼の媒酌人は、司法大臣等を勤め不平等条約改正に寄与し、日露戦争時に米國政府の支持を得るべく特使として派遣された金子堅太郎であるし、パリで夫妻と深い友誼を結ぶフランス公使の栗野慎一郎はその後ベテルブルクへ転任し、宣戦布告の勅書をロシア側に手渡すことになる（東京谷中の天王寺にあった音二郎の銅像の台座の碑文はこの二人の書である）。また、1899年の米國公演の折には、当時公使で、後のポーツマス講和会議全權小村寿太郎に引き立てられ、公使館でマッキンレー大統領臨席のもとで上演して好評を得た。三度目の渡欧時にはベルリンで伊藤博文と歓談の一夜をともしている。

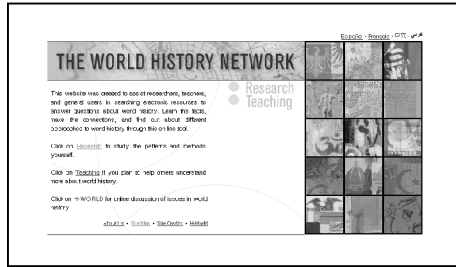
さて、海外では概ね賛辞を以て迎えられた川上夫妻の演劇であったが、日本での評判は必ずしも芳しくなかった。その事情を踏まえて、貞奴は「妾は輸出役者などと悪口を云われて居ります」（『演芸画報』1911、2）と語っている。しかし、多くの日本の評家が断じたように、海外の成功はエキゾチズムにのみ由来するものではおそらくないだろう。前述のように、貞奴に惹きつけられたのは、おもに19世紀のナショナリズムに依拠した芸術とは一線を画そうとするモダニズムの表現者たちであった。物語性を排し、ことばとしての文学、音としての音楽、色や線、面としての造形を思考したモダニストの眼差しが、日本語の台詞や「日本文化」を離れた地点で、一個の身体表現者貞奴を成立させたという側面は決して看過しえないだろう。また、国家、社会と人との相関を映す芸術潮流の、先進欧米諸国と後進国日本の間に横たわる差異に音二郎、貞奴自身が気付かずにはいたとは思えない。武勇伝、冒険譚に終始しがちなこの二人の演劇人について、もっと彼らの交友や上演活動から、彼らが世紀転換期の日本と世界をいかに感受し、表現しようとしたのかが今後探られるべきだろう。それは、世界の諸地域が各様の発展をしながらも、同時に密に関連しあう姿を見せてくれるひとつの事例となるに違いない。

【ピカソ画 貞奴、1900】

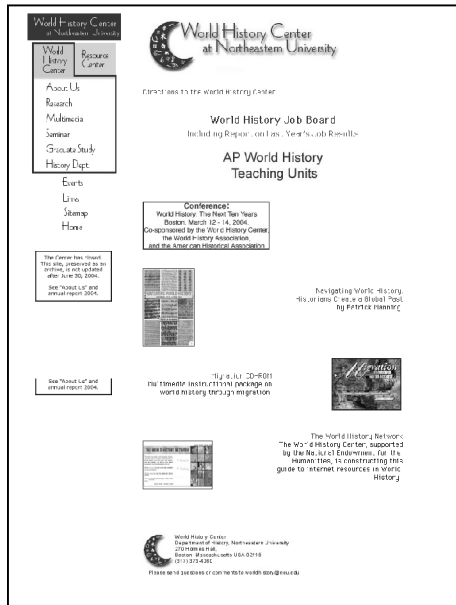


Web 世界史

毎回 Web や CD-ROM など電子化された世界史研究情報を紹介していきます。
なお世界史研究所のウェブサイトにもここで紹介したものを掲載しています。



▲ World History Network トップページ
<http://www.worldhistorynetwork.org/>



▲ World History Center トップページ
<http://www.whc.neu.edu/>
今後は更新されないがアーカイブとして
存続する

World History Network (US)

<http://www.worldhistorynetwork.org/>

今回紹介するのは World History Network というウェブサイトです。この World History Network は、今年の6月30日にノースイースタン大学の World History Center が閉鎖されたため、ウェブ上でのその活動を発展的に継承するサイトとして開設されました。(同センターのサイトは今後は更新されないものの、アーカイブとして存続。<http://www.whc.neu.edu/>)

World History Network では、世界史研究と世界史教育の両面での電子化された情報の提供を行っています。研究情報や教育方法を提供するウェブサイト、ウェブ上に公開されている文書ファイルなど、様々な情報を検索・登録できるシステムを構築しています。また研究者・教員による情報交換用のフォーラムも設置されています。こうした情報の共有、交換を通じて研究者個人、研究分野、大学などの組織を横断するネットワークを構築することが目的として掲げられています。しかしながら現在はまだ出来たばかりで、登録されている情報の件数は十分な量に達しているとは言えません。

そこで、組織自体は閉鎖されてしまいましたが、サイトは残っている World History Center も少し紹介したいと思います。同センターは1994年に設立され、今年10年間の活動を終了しました。同センターのサイトは大きく2つのカテゴリーに分かれています。ひとつは「World History Center」であり、こちらでは過去の研究会情報や、世界史研究のための文献目録、World History Databank と名付けられたプロジェクト（ソヴィエト経済の推移や大西洋奴隷貿易などのデータ）が掲載されています。ふたつめのカテゴリーは「Resource Center」であり、こちらは世界史を教える教育者向けの情報となっています。センター運営の図書館のカタログ検索や、勉強会の情報、世界史をカリキュラムとして教えることの意味などを提示しています。

両方のサイトともに、世界史の「研究」と「教育」を強く意識し、大学の研究者・学生や高校の教員など、世界史に携わる人々の広汎なネットワーク形成を目指しているサイトと言えるでしょう。なお、World History Network は現在、ノースイースタン大学教授の Patrick Manning が主宰しています。世界史研究所では、彼の2003年の著書 *Navigating World History: Historians Create a Global Past* (New York: Palgrave Macmillan, 2003) の翻訳作業をすすめています。

世界史研究所ウェブサイト開設

<http://www.npo-if.jp/riwh/index-j.html> (日本語版)

日本の世界史研究所ウェブサイトも7月10日からオープンしました。こちらも出来たばかりのサイトのため、これから内容を充実させていかなければなりません。当研究所の目的でもある世界史研究の情報拠点として、電子化された情報を発信していく予定です。

現在は研究所の目的や活動などの基本情報の他、この Newsletter のウェブ版を公開中です。(Newsletter は今号は無料公開、次号以降は利用会員を対象に公開する予定です。) 今後は英語版ウェブサイトの開設、研究会の案内や世界史研究文献目録などの情報提供、ウェブ上でのフォーラムの場の設置などを進めていく予定です。また、上述の World History Network などとの連携をはかり、日本での世界史研究の基盤を構築していきたいと考えています。

みなさまも世界史研究についての情報や、コンテンツに関する要望などを、ぜひお寄せ下さい。メールアドレス: world_history@npo-if.jp



※写真は制作中の画面です。

世界史研究所規約

1. 目的

本研究所は、世界史の研究を促進し、もってわが国の国民の世界史意識を向上させることを目的とする。

2. 所属

本研究所は、NPO 歴史文化交流フォーラムのもとにおかれる。

3. 事業

本研究所は以下の事業を行う。

- 1) 世界史の研究
- 2) 世界史研究の情報拠点の形成
- 3) 世界史の研究成果の出版
- 4) 世界史意識の向上に関する事
- 5) その他

4. 組織

本研究所には所長、顧問、研究員をおく。

5. 研究所会議

所長、研究員によって研究所会議を構成する。
本研究所の運営方針は研究所会議にて決定する。

6. 利用会員 ※

本研究所に、利用会員制度を設ける。
利用会員制度については、別に定める。

7. 財政

本研究所は、NPO 歴史文化交流フォーラムの資金によって、運営される。

8. 解散

本研究所は、研究所会議の申し出を受け、NPO 歴史文化交流フォーラムの決定により、解散する事ができる。

9. 発足

本研究所は、2004年7月10日をもって発足する。

※利用会員制度については研究所ウェブサイトをご覧ください。 <http://www.npo-if.jp/riwh/>

NPO 歴史文化交流フォーラム (略称 NPO-IF) について

NPO 歴史文化交流フォーラムは、グローバル化が進む現在、その意義を失おうとしている世界各地の歴史的な価値をもつ民衆文化の研究とその交流を促進し、もって文化、芸術の発展と国際交流に寄与することを目的としています。その際、本フォーラムは世界の発展途上諸地域の民衆文化と我が国の地方の民衆文化に注目し、さらに発展途上諸地域としては東・東南アジアと東欧を対象地域を絞っています。本フォーラムは、我が国を含め世界各地の個性ある土着的民衆文化が多様に花開くような世界が望ましいと考えています。 NPO-IF ホームページ：<http://www.npo-if.jp/>

世界史研究所スタッフ紹介

所長 南塚 信吾 (法政大学教授)

顧問 西川 正雄 (東京大学名誉教授)

下村 由一 (千葉大学名誉教授)

田中 一生 (バルカン文化史)

Ivan T. Berend (UCLA 教授)

研究員 木村 英明 (早稲田大学講師)

吉橋 弘行 (千葉大学大学院 博士(文学))

鹿住 大助 (千葉大学大学院 博士課程在籍)

世界史研究所会議室の使用について

世界史研究所所在地の渋谷のビルには、利用会員向けの会議室スペース(大・小)があります。

下記の使用規定をご覧の上、お申し込み下さい。(※使用申込書は研究所ウェブサイトからダウンロードできます)

1. 趣旨

会議室は、世界史研究を促進する目的で、歴史学に関する研究会等の学術的な会合のために、世界史研究所利用会員にたいして貸し出すものとする。会議室を使用した研究会等は、会議の内容を世界史研究所の書式に従って、1部提出するものとする。

2. 施設

- 1) 小会議室 8階(研究所事務所内) 最大約15人収容
- 2) 大会議室 10階(スカイガーデン) 最大約50人収容

3. 費用

会議室の貸し出しにあたっては、使用実費を徴集するものとする。小会議室は2,000円、大会議室は3,000円とする。

4. 利用時間

小会議室は、午後6時～午後10時
大会議室は、午前10時～午後10時
日曜・祭日は除く。一回の使用は最大4時間とし、4時間を超える場合は別途相談する。
※スタッフが主催する場合は、この限りではない。

5. 申し込み

使用申込書に記入の上、メールないしはファックスにて、研究所まで。回答をもって、受付完了とする。

6. 部屋の開閉

平日の開室は、9階のビル管理事務所が行う。
土曜日の開室は、ビル管理事務所の係りが行う。
閉室は、使用者がテンキーにて行うものとする。
※スタッフが参加する場合は、この限りではない。

Research Institute for World History, Newsletter, No. 1

Why We Found the Research Institute for World History ?	Shingo Minamizuka (1)
Survey of World History	
Book Review	Shingo Minamizuka, Hiroyuki Yoshihashi, Kazuo Tanaka (2)
Patrick Manning, <i>Navigating World History: Historians Create a Global Past.</i>	
Book Review	Yudai Anegawa (3)
Ivan T. Berend, <i>History Derailed: Central and Eastern Europe in the Long Nineteenth Century.</i>	
Otojiro's and Sadayakko's Tour of the West about 1900	Hideaki Kimura (4)
WEB World History (A review of electronic materials for world history)	(5)
Statute of RIWH	(6)
RIWH Staff	(6)
About Meeting and Conference Rooms	(6)

The Research Institute for World History is founded in July 10, 2004 in the framework of NPO: International Forum for Culture and History that was founded in Tokyo in 2003.

The Research Institute for World History is intended as a cyber institution for helping and developing research and education of world history. World history means not collections of regional and national histories of the world but history of world as a whole.

Purpose of the Institute:

- To promote research and education of world history in Japan
- To collect and provide information on research and education of world history
- To popularize the necessity of world history in Japan
- To keep contact with other institutions and groups concerned with world history

Activities:

- To maintain a website on world history
- To organize academic meetings and projects on world history
- To offer meeting places for the academic groups on world history
- To make book reviews on world history
- To publish books on world history

Office:

Research Institute for World History
2-17-3 Shibuya, Shibuya-ku, Tokyo, Japan, 150-0002
Tel. +81-3-3400-1216 Fax. +81-3-3400-1217
<http://www.npo-if.jp/riwh/>

Staff:

Shingo Minamizuka, Director (Professor, Hosei University)
Ivan T. Berend, Adviser (Professor UCLA)
Masao Nishikawa, Adviser (Emeritus, University of Tokyo)
Yuichi Shimomura, Adviser (Emeritus, Chiba University)
Kazuo Tanaka, Adviser
Hideaki Kimura, Researcher
Hiroyuki Yoshihashi, Phd. Researcher
Daisuke Kazumi, MA, Researcher

世界史研究所 連絡先・地図

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-17-3
渋谷アイビスビル8F

TEL 03-3400-1216

FAX 03-3400-1217

E-mail world_history@npo-if.jp

URL <http://www.npo-if.jp/riwh/>

※研究所への電話でのご連絡は、
水曜日・金曜日の午後をお願いいたします。

